

佛國エド  
増補譯述  
代  
言  
人  
之  
關  
於  
法  
則  
通  
用  
箇  
條  
完

同法省記錄文庫  
第八百五十號

第 第 第  
三 三 六  
架 架 號

司法省記錄課藏書  
第一二號

司法省  
第一〇號  
寄贈圖書文庫

B230  
S 2  
35

佛國代法

佛國工下  
補譯述

代理人之  
法則通用箇條  
完

同法省記錄文庫  
第八百五十號

第 第 第  
三 三 六  
號 架 號

司法省記錄課藏書  
第一一二號

司法省  
第一一二號  
寄贈圖書文庫

B230  
S 2  
35

佛國工下  
增補譯述  
代理人之  
法則通用  
箇條  
完  
八百五十號

十八

台刊各記官ノ原キ就キ写ニ取ル所ノ者

佛國ニ下増補譯述  
代言人ニ関スル法則通用箇條

B230  
S 2  
35

可格者 3天  
B230  
P2-35  
A.C.

千八百四年三月十三日法學校ニ関スルノ  
法則

第四卷 法學及ヒ法學位免狀ニ據ルノ事務

第二十四條 凡千八百八年九月二十三日以來  
裁判所ニ於テ代言ノ事務及ヒ大審院ニ於テ  
代言ノ事務ヲ為サント欲スル者ハ先ツ檢事  
局ヘリサンシニ位ノ免狀ヲ差置キ其檢事ノ  
評判ヲ受ケテ其免狀ヲ簿冊ニ記サシム可シ

第五卷 裁判所ノ代言人表録

第二十九條 各裁判所ニ於テ代言人ノ表一通  
ヲ備ヘ置ク可シ

第三十條 千八百八年九月廿三日以來表面ノ  
姓名順序ニ署スルノ代言人次ニ拜命日順序  
ニ署スルノ代書人ハ其裁判所ノ判事補事故  
アリシ時判事或ハ檢事補ヲ代理スルヲ得可  
シ

第三十一條 自今以來事務ヲ執行スルニハ其  
前代言人代書人右ノ誓約ヲ立ツ可シ  
一他人ノ名代又ハ總代人ノ趣旨ヲ以テ法律規  
則或ハ國ノ安寧國民ノ安堵及ヒ其風儀ニ妨  
害スル事ヲ決メ申述可シ書記セス又ハ何等  
ノ場合ニテモ裁判官及公推ヲ尊敬スル丁ニ  
離ル可カラス

第三十二條 何サンシエ位ノ免狀ヲ得タル代書

又ハ其拜命セラレタル裁判所ニ於テ相手方  
ノ代言人ニ對シ自身ニ擔當スル事件ノミニ  
付テ之ヲ答辯シ及ヒ其陳述書ヲ作ル可シ  
若シ代言人ハ缺席シ或ハ答辯ヲ不諾セシ  
有ル時ハ裁判官ヨリ何サンシエ位ノ免狀ヲ得  
ス代言人ト雖モ之ニ命シ答辯セシムル丁ヲ  
許ス可シ

千八百十年十二月十四日布告代言人ノ事務  
執行及ヒ其取締ノ事

第一卷 一般ノ定例

第一條 千八百四年三月十三日ノ第二十九條  
ノ趣ニ依リ各上等裁判所并各郡裁判所ニ於  
テ其事務執行スル代言人ノ表一通ノ備ヘ置  
ク可シ

第二卷 代言人ノ表并其任許及ヒ簿冊ニ登記  
ノ事

第八條 毎年各裁判所開廳ニ付テハ表面ヲ取  
調ヘ人名ヲ進退増減シテ新表ヲ刷行ス可シ

第九條 表面署名ノ者ニ限リ均シク代言人ノ組合ト為ス可シ

第十條 上等裁判所ノ代言人若シ郡裁判所ノ代言人ト為ラシテ欲スル者ハ其上等裁判所ノ表面ノ姓名順序ニ依リテ郡裁判所ノ表面ニ登記ス可シ

第十三條 同一位ヲ持レテ代言人ト為ラント欲スル者ハ先ツ検事局ニテ其免狀ト及ヒ法學校ノ簿冊登記ノ証書トノ檢閲ヲ受ク可シ

第十五條 見習勤ノ証書ハ取締局ヨリ下渡ス可シ若シ取締局ノ設ナキ時ハ検事局ヨリ下渡ス可シ

第三卷 取締局ノ事

第二十四條 凡取締局ニ於テハ一週日間コトニ一度會議場ヲ取設ケ無費用ニテ窮民諸願ノ事情ヲ採擧聞届ク可シ

其諸願中正實直理アル者ハ會議場之ヲ評議シ其書面ヲ作り取締局ニ差出シ之ヲ局長ヨリ代言人ニ配当擔任セシム可シ

其會議場ニ於テハ諸願ノ事情ニ付テ嚴密ニ注意シ等閑ニス可カラズ若シ嚴密ニ注意セサレハ窮民負訴訟ナル時其相手方ハ訴訟入費ヲ受取ルヲ得スノ殊ニ遺憾ナレハナリ

見習勤ノ代言人ハ其會議場ニ必ス懈怠ナク

出勤ス可シ此趣ヲ檢事ハ格別ニ監察ス可シ  
且亦檢事ノ存意ニ任セ其會議場へ出勤セシ  
ムル丁モ指揮ス可シ但シ出勤セシムルハ更  
番ニ命ス可シ

第四卷 代官ノ職務及權ノ事

第三十三條 代官ノ組合社中ニ於テハ前十  
九條ノ趣ノ通り取締局ノ人負ノ投票ヲ成シ  
或ハ組合頭取ノ差因ヲ際クノ外ハ慢リニ其  
社中へ集會スルヲ得ス

右評議スルノ外論議ス可カラス若シ之ニ違  
背セシ者ハ刑法第二百九十三條ノ趣ニ依リ  
テ罰ス可シ

第三十四條 若シ或ル裁判所ノ代官ノ総組  
或ハ半組等共ニ和同シテ何等ノ故ナリ以  
來職務ヲ辞スルト申出ス時ハ即時ニ其人名  
ヲ表面ニ削除シ決テ再度登記スルコトヲ許サ  
ス

第三十五條 代官ハ可サシ工位又ハドク  
トル位ノ定式ノ装束ヲ着ス可シ又表面登記  
ノ者ハ訟廷ノ欄内ニ坐ス可シ  
佇立示談スルニ帽ヲ冠スト虽モ或ハ評判シ  
或ハ争訟ニ関スル書類ヲ讀ム時ニハ必ス帽  
ヲ脱セサル可カラス

法律ニ定リタル場合ニ付裁判官若クハ檢事  
官ノ代理ト為ル可シ

但シ事故差支ヘ之レアル時ハ其代理ヲ辞  
スルヲ得可シ



第三十六條 凡テ始末各陳述書等ニ押印スル  
トニ付テハ必ス自筆自断ニ限ル可シ又謝金  
ヲ受ルニ付其為換手形ヲ書セシメ又ハ其示  
談前ニ受取ル者ハ初度ニハ罰責シ再度ニハ  
表面ノ姓名ヲ削除ス可シ

第三十七條 代言人ハ正理眞實ヲ體守シ自由  
自在ニ職務ヲ行フト但事實ノ臆測、詐告及  
窮達猥雜等決メ申述フ可カラス又相手方及  
ニ其代書代言人ヲ侮慢シ罵詈スルトヲ禁ス  
同シク相手方ノ名聞耻辱ニ關係スル重事ヲ  
發言ス可カラズ但シ其場合爭訟ノ筋ニ付己  
ハヲ得サル時ハ書面ヲ以テ其本人或ハ其代  
書人ノ使令ニ隨フテ申述ブルトヲ得可シ右

等ノ事ニ違背スル者ハ刑法三百七十一條ノ  
趣ニ依リ罰ス可シ

第三十八條 同シク申述書記スル等ノ面前ニ  
裁判官ヲ尊敬スルトニ離ル可カラス又總テ  
出席ノ法官モ必ス同様ニ敬セサル可カラズ  
第四十一條 民事ニ付テ或ル相手方ノ代言人  
之レ無キ時ハ裁判官ノ意ニ任セラ一人ヲ差  
シ命ス可シ

第四十二條 刑事ニ付テ訴ヘラレタル者ノ為  
ニ命セララル、代言人ハ不諾スルトヲ得ス但  
シ事故故障アリテ申立允許ヲ得レハ此限ニ  
ホス

第四十五條 此卷箇條ノ為メニ裁判所ノ申渡

判決ニハ控訴スルヲ得ルト虽モ假リニ決放  
ヲ為ス可シ

千八百十一年十月三日布告「バリ」ノ上等裁  
判所ノ代官人盟約ニ付金二十五フランヲ  
拂出スノ事

第一條 此布告以來「バリ」ノ上等裁判所ノ代  
官人ハ盟約ヲ成ユニ付金二十五フランヲ拂  
出升、ル可カラズ

第二條 右ノ積金ヲ以テ

- 一 代官人ノ書室及會議場ノ入費ニ仕拂
- 一 貧窮ノ代官人或ハ其寡婦孤兒等教育ノ  
為メ代官人社ヨリ使令ノ上ニ遣拂フ可  
シ

第三條 上等裁判所ノ書記官長ハ此ニ託シタ

ル金貨ヲ受取り代言人社、會計、渡ス可シ

千八百十二年八月二日布告争辨ノ事

第一條 各上等裁判所ニ於テ表面登記ノ代言人  
或ハ千八百十年十二月十四日布告ノ十六條ニ依リテ見習勤ノ代言人ハ簿冊順序ノ争訟ヲ争辨ス可シ

第二條 一時決判ス可キ訴訟ヨリ不時ニ沸出タル願及ヒ其筋ニ関スル不時ノ事情ヲ其上等裁判所ノ代書人自身擔當シテ之ヲ争辨ス可シ

第三條 同シク上等裁判所々在、郡裁判所并巡回裁判所所在、郡裁判所及ビ首府、郡裁判所等ニ於テハ一時決判ス可キ訴訟ヲ代書

人争辨シ其他ノ郡裁判所ニ於テハ其擔當シ  
タル訴訟ヲ一切争辨ス可シ

第四條 千八百十年十二月十四日、布告中或

ル箇條ノ趣ニ依リ九ノ代言人ハ其姓名ヲ表  
面ニ登記シタル上等裁判所又ハ府縣裁判所

ニ於テハ勿論其職務ヲ行フ可レト雖モ若シ  
其他ノ裁判所ニ於テ争辨スルモ必ス司法

卿ノ許可ノ上之ヲ為ス可シ

第五條 若シ代言人或ハ欠席スルカ或ハ争辨

ヲ肯セサルモハ上等裁判所郡裁判所ノ代書  
人ハ裁判官ノ許ルニテ以テ何等ノ訟事ナリ

トモ争辨スルヲ得可シ

第六條 訴訟其書類ヲ一切擔當セル代言人ハ

其争辨ノ日ニ至リ病發出席シ能ハサルモ  
書面ヲ以テ列席前裁判官長ヘ之ヲ届出テ以  
テ其書類ヲ代書人ニ差出ス可シ其場合ニ於  
テ代書人ハ争辨シ又ハ訴訟ノ日延ヲ為シ得  
可シ

第七條 若シ又裁判順序ニ至ルモ其代言人同

裁判所内ノ他箇ニ切要ノ事故マリテ之カ代  
言ヲ為シ得サルモ前條ノ通り取計フ可シ

第八條 前六條七條ノ場合ヲ除クノ外若シ擔

當ノ訴訟書類ヲ持スル代言人ハ其裁判順序  
ニ至ル時ニ缺席ヲ為スカ若クハ其失策ニテ

訴訟ヲ争辨スルヲ得不及ヒ簿冊ノ順序ヲ失  
フ時ハ其本人己ムヲ得ヌ日延ヲ為スニ付其

雜費、償金ヲ代官人ヨリ得ニテ出訴スル  
トヲ得可シ

第九條 千八百四年三月十二日ノ法則ヲ以テ  
此布告ヲ施行スル迄代官人ハヨリサシニ位ヲ  
受ケ及ヒ其法則第三十二條ノ趣ニ設ケタル  
權ヲ爾來迄前ノ通ニ執行ス可シ

第十條 此布告以來一ヶ月間ヲ限り及ヒ毎年  
開廳ノ節ニ於テハ上等裁判所郡裁判所ノ代  
書人、社長ヨリ其裁判所ノ書記局へ前九條  
ノ場合ニ関スル代官人、総姓名票ヲ差出ス  
可シ但シ其名票ハ社長押印シ次ニ換事ノ銜  
印ヲ押ス可シ

第十一條 千八百十年十二月十四日ノ布告ノ

第三十七條三十八條三十九條ノ趣ヲ爭辨ス  
ルノ権ヲ得ル代官人ニ附合ス可シ

第十二條 千八百十年十二月十四日第三十五  
條ノ趣ニ依リ代官人ノ定式ノ裝服ヲ着テ  
帽ヲ冠ス可シ

千八百二十二年十一月二十日、布告代  
言人職務、規則及ヒ取締、事

第一卷 表録、事

第一條 千八百四年三月十三日、法則、第二  
十九條、趣ニ依リ表面登記、代言人、姓名  
ハ以來其件々ヲ以テ分別登記ス可シ

第二條 百名以上、ハルハ七件ニ別テ百名以  
下五十名以上、時ハ四件ニ別テ五十名以下  
三十五名以上、時ハ三件ニ別テ三十五名以  
下二十名以上、時ハ二件ニ別テ可シ

第三條 前條、別々ハ先ツ代言人、社長并ニ  
上等裁判所及ヒ都裁判所、檢事局ヨリ集會

ヲ命セラルル、取締局、法令ヲ以テ別ケテ為  
ス可シ

第四條 若シ上等裁判所、検事局又ハ取締局  
ノ需用アル時ハ、三ヶ年毎ニ右ノ件別ヲ更正  
ス可シ

第五條 何裁判所ニテモ凡テ代言人其職務ヲ  
實行セタル者ハ其姓名ヲ表面ニ記載シ置リ  
可カラズ

第六條 歳首毎ニ其表面ヲ別行シ其裁判所ノ  
書記局ニ藏ス可シ

第二卷 取締局ノ事

第七條 取締局總負

- 一 役前代言人、社長ヲ為レタル者總負
- 一 表面ノ順序ニ依リ各部ノ件ニ記スル老練  
ノ者ニ名宛
- 一 書記一名

但シ其擢舉方法ハ勤続十年且齡三十歳  
以上ノ者ニ限ル可シ

第八條 社長并書記ハ取締局、マジョリテブソリワレ  
ノ法ニテ擢舉ス可シ右ノ擢舉ハ歳首コトニ  
各裁判所、検事局ヨリ集會ヲ命シテ更改ス  
可シ

第九條 代言人、社長ハ取締局、長トス

第十條 上等裁判所、表面登記、代言人ノ員  
二十名不足、時ハ其同所、郡裁判所ニテ其

取締局ノ事務ヲ執行シ若又郡裁判所ノ表面  
同様ノ時ニ猶同郡裁判所ニテ其取締局ノ事  
務ヲ執行フ可シ

第十一條 前十條ノ趣ニ依リ取締局ノ事務ヲ  
行フ裁判所ニ於テハ毎年開聽ノ日ニ其表面  
三部ノ内第一二ノ部ヨリ順序ニ依テ一若ヲ  
撰ビ之ヲ社長ト成ス可シ

第十二條 取締局ノ事務ハ左ノ如シ

- 一 代官人ノ表面ニ姓名ノ登記方ヨリ生スル  
論ヲ和解ス可シ
- 一 代官人社ニ必要ナル利益及ビ其榮辱ニ  
關スル一ツヲ檢察ス可シ
- 一 加罰アル節ハ規則ニ照ラシ取締局ノ罰ヲ

以テ擬律ス可

第十三條 取締局議事ス可キ權ハ左ノ如シ

- 一 リサンニ位ヲ以テ上等裁判所ニ盟約ヲ成シ  
タル代官人見習勤ノ
- 一 見習勤ヲ經タル期限ヲ以テ表面ニ登記
- 一 一度代官人職務ヲ辭シ再度表面ニ登記ノ  
情願

第十四條 取締局ハ皇帝及ヒ君民同治ノ法ニ

忠貞ヲ竭クス如ク其社中ヲ監察ス可ク又正  
義柔順及ビ良賢ノ行為ヲ以テ代官人社ノ榮  
譽ヲ耀マカス一ニモ尤モ檢察ヲ加フ可シ

第十五條 若シ表面ニ登記セラレタル代官人  
決策又ハ規則ニ違反セル事件アルハ取締



局ハ直ニ罰シ或ハ他人ノ訴ヘ、上之ヲ罰ス可シ

第十六條 前十五條ニ拘ハラズ若シ代言人出席ニテ失策或ハ規則ニ違フトアルキハ固ヨリ裁判官ハ直々ニ之ヲ罰ス可シ

第十七條 換事局又ハ民事ノ原告人ノ趣意ニ依リ輕重罪ト見做ス可キ為ニ代言人ヲ裁判所ヘ呼出ス筈ノ時ハ之ヲ取締局ニテ罰スルノ權ニ及ハズ

第十八條 取締、罰尤ノ如シ

一 彈告

一 譴責

一 有期ノ間停職

但シ其期限十二ヶ月以上ニ過ク可カラズ

一 表面ヨリ姓名ノ削除

第十九條 允リ取締、罰ヲ擬律スルニ付キ前以テ必ス訴ヘラレタル代言人ヲ推問シ或ハ八日期限ノ呼出レ状ヲ其代言人ヘ渡シ置ク可シ

第二十條 取締局ノ事務裁判所ニテ之ヲ行フキハ必ス社長ノ意存ニ因ラサハバ取締、罰ヲ擬ス可カラズ

第二十一條 凡ソ有期間ノ停職及ビ表面姓名ノ削除ノ罰ヲ加ヘラル、時ハ三日間ニ大換事官、申届ケ大換事官ハ之ヲ決放シ之ヲ換察

ス可シ

第二十二條 凡ソ彈告及ヒ譴責ニ付大換事ノ  
意ニ任セ需用ニ依リ其罰ノ決定書ヲ差出ス  
可シ

第二十三條 又若シ取締局ニ於テハ誹ハラレ  
タル代言人救免ノ時ニ其吟味ヨリ生スル落  
着書一通ヲ大換事ニ差出ス可シ

第二十四條 凡有期ノ同停職及ヒ表面姓名ノ  
削除ニ罰セラレタル代言人ハ其裁判所ノ管  
轄上等裁判所ニ控訴スルコトヲ得可シ

第二十五條 前十五條ノ場合ニ於テハ取締局  
ノ決定ハ大換事ヨリ控訴スルコトヲ得可シ  
第二十六條 前條ノ大換事並代言人ノ控訴スル

日限ニ於テハ社長ヨリ取締局ノ決定ヲ告知  
セシ日ヨリ十日間ニ限ル可シ

第二十七條 前條ノ控訴ニ付テハ千八百十年  
四月二十日ノ法則ノ第五十二條ニ記スル各  
裁判所ノ取締局ノ罰ニ照ラシ上等裁判所ノ  
會議場ニテ総集會ヲ以テ之ヲ議定ス可シ

第二十八條 代言人控訴スル時ハ前條ノ集會  
ニ於テ議定ノ可否ニ遵ヘハ別ニ大換事ノ申  
立ナシト雖モ上等裁判所ヨリ加等ニ罰スル  
コトヲ得可シ

第二十九條 凡ソ譴責又ハ停職ノ罰ヲ加ヘラ  
レタル代言人ハ表面ノ件ノ下ニ姓名ヲ落シ  
テ改署ス可シ

第三卷 見習勤ノ事

第三十條 見習勤ノ期限ハ三ヶ月ニ限ル可シ

第三十一條 其期限ヲ経ルニ付テハ一ヶ所ニ

限ラス教ヶ所ニ出勤スルヲ得然レモ其勤明

ケ移轉ノ間ハ三ヶ月以外ニ越エ可カラス

第三十二條 場合ニ依リテ取締局ハ見習勤ノ

年限ヲ増加スルヲ得可シ

第三十三條 尤見習勤ノ代言人ハ表面ニ加ル

ト無シト虽モ其各名ヲ順序ニ表面ノ各件ノ

下末ニ登記ス可シ

第三十四條 何訴訟ニ於テモ見習勤ノ代言人

ハ表面中自名ノ件内ニ記スル取締局ノ二員

ヨリ二年間續精勤ノ証書之無キ者ハ見習書

モ爭辨スルヲ得可カラス但シ其証書ニハ

取締局ノ押印アル可シ

第三十五條 代言人ノ表面ノ名教ハ二十名以

下有ル裁判所ニ於テハ前條証書ヲ裁判長官

并檢察官ヨリ下渡ス可シ

第三十六條 二十二歳ニ當ル見習勤代話人ハ

其証書ヲ所持スルニ及ハス

第三十七條 位ヲ持スル代書人ハ一

度其職務ヲ辞退スル後代言人ノ社中ニ加入

セント欲スル者ハ必ス見習勤ヲ經サシ可カ

ラス

第四卷 一般ノ定例

第三十八條 上等裁判所ニ於テハアリサンレエシ

位ヲ持スル者ヲ代言人ト成ス可シ誓約ヲ立ルト左ノ如シ

第一ニ皇帝ニ忠誠ヲ竭リシ君民同治ノ憲法

ヲ遵奉シ異見書答辯書及ヒ法律規則或ハ

國ノ安寧國民ノ安堵及ヒ其夙儀等ニ妨害

ナルトラ変レテ申述可ス書記セス又何等

ノ場合ニテモ裁判官及ヒ公權ヲ尊敬スル

トニ離ル可カラス

第四十一條 刑事ニ付テ訴ヘラレタル者ノ為

ニ命セララル、代言人ハ不諾スルトヲ得ス但

シ事故故障アリテ巡回裁判所ヘ之ヲ申立若

シ其允許ナシト雖モ猶不諾スル時ハ前十八

條ノ罰ノ中一等ヲ加フ可シ

第四十二條 代理ノ事務ヲ除クノ外兼勤ヲ得

ホルト左ノ如シ

一州令郡令

一州令事務

一書記官ノラヘル又ハ代書人

一會計方又ハ有月給ノ職務

一諸商法

一訟事即  
一訟事即  
一訟事即

第四十三條 凡ソ書面及ヒ争辯中ニ於テ宗旨

君民同治法憲法法律公權等ヲ誹謗スル代言

人ハ直ニ檢事ノ許判ノ上ニ第十六條ノ罰ノ

中一寄ヲ裁判所ヨリ申付ヲ可シ但シ此ハ尋  
常ノ訴ヘト相聞觸スルナカレ可シ

第四十四條 千八百十年四月二十日ノ法則第

九條ノ趣ニ依リテ各上等裁判所ヨリ淳良  
智聰敏義侯等ノ赫タル行跡ナル代  
言人ノ姓名ヲ毎年司法卿ヘ上奏ス可シ

第四十五條 千八百十年十二月十四日ノ布告

廢止但シ代  
言人ノ權并ニ事務ノ事ニ付テハ  
其習慣ヲ廢セザル可シ

第五卷 通定例

第四十六條 千八百十年十二月十四日ノ法則

ニテ此布告以前ニ設ケタル取締局ハ其千八百

十年ニ限リタル時節迄其儘ニ蒙置ス可シ

第四十七條 前四十六條ノ取締局ハ職務ヲ執

行ニ付テハ此布告ニ遵フ可シ

千八百三十年八月二十七日、布告代  
、職行ノ規則

第一條 茲布告以來取締局、負ヲ設クルニ付  
キ表面登記、諸代  
言人集會、上投票ヲ以テ  
之ヲ定ム可シ

但シ其投票、方法ハ「マジヨリテレラチ  
グ」兼「スクルテ  
ントリスト」ヲ以テナス可シ

第二條 取締局假リ定、総負  
充ノ如シ

一 表面登記ノ代  
言人三十名以下ナル場所并

ニ以前取締事務ヲ執行セシ裁判所ニ於テハ

其取締リノ負五人ト定ム

一 表面登記ノ代  
言人三十名以上ナル場所ハ

七名ト定メ若シ五十人以上百人ナレバ九

名又百人以上ナレバ十五名ト定ム且ハリ  
ニ於テハ二十一人ト定ム

第三條 此集會ノ時取締局員ヲ撰ブ前時ニ「ス  
クニテ」ニ非ニマヨリテアツリウレヲ以テ代官人ノ社長  
ヲ撰奉ヌ可シ

第四條 自今治罪法ノ第二百九十五條ノ場合  
ヲ除クノ外凡ソ表面登記ノ代官人ハ何所ノ  
裁判所ニ於テモ允許ナクシテ職ヲ行ヒ得可  
シ

第五條 自今成文ケ急遽ヲ以テ代官人職行ノ  
法則ヲ決定ヌ可シ

